

「小人閑居して消費税を論じる」の予告

2018年12月中旬筆

<消費増税をめぐる喧噪の始まり>

さる10月15日、臨時閣議の席上で安倍晋三首相は、法の定めるところに従って来年(2019年)10月1日に消費税率を現行の8%から10%に引き上げる、と表明した。過去に2度、公約を覆して10%への引き上げを延期に持ち込んだ首相のことなので、すんなり「3度目の正直」になるのか、ひょっとしたら「2度あることは3度ある」なのか、先行きはまだまだ不透明だと言わざるをえない。

首相表明の時点では、増税実施期限までに約1年を残しており、客観的に見て当該問題への社会的な関心はさほど高まっていなかった。だから唐突の感がかなりありはしたが、むろん政権には様々な思惑があったに違いない。それはともかく、やや不意打ち的に消費税率2%アップ劇の第3幕が開くや、すぐさま各方面で種々の反応が現れだし、論壇状況も急速に熱をおびるようになった。長丁場になること請け合いの喧噪の火ぶたが切って落とされた。

私自身は、消費増税がホット 이슈になり始めた状況を目の当たりにして、心ひそかに時節到来とほくそえんでいる。それも「小人閑居して不善を為す」の警句に、私なりの理由でいたく感じ入りながら。

そこで私の個人的な事情ですが…。何分にも起点が大昔なので、自分史の整理作業の一環とも位置づけて回顧ふう述べることにいたします。

<「趣味としての独習」とそのターゲット>

私が京都大学経済研究所を63歳で定年退職したのは2007年3月だったが、その後ずっと、やり残した研究上の仕事が気にかかってきた。いや、本当ははるかに早くから意識してはいたのだが、より優先度の高い課題が常に存在し、本格的に立ち入れないままに時が経った。ことに定年前の10年間は、家族の長期療養に伴う介護の必要から研究時間が大幅に制約されたし、最後の数年は体調の悪化も加わって、なす術もなかった。

胃がん手術を受けた翌年に半病人状態で京大を去り、さらに何年か経って健康を回復してからも、以前からなじみの専門領域(おもに国際政治経済学関連)の動向をウオッチするだけで精一杯。怠け心も多少は作用したかもしれないが、介護に加えて孫育ての任務も

肩にかかってきて日常生活が「家庭内ヘルパー」業務中心になってしまったのだから、新しい分野の開拓などそもそも出来ない相談だった。

正直なところ、これらが私の主要研究対象だと自認してきた問題領域への関わり方であっても、投入できる時間はろくすっぽなし、空間的移動の自由も利かず学会や研究会で議論を闘わず機会もほとんど持てないときは、実質的に「趣味としての独習」と大差ない。いわば習性的に国際関係上の事象に視線を向け続けても、皮相的な観察の域にとどまるのがオチだろう。だいいち、テーマの性格からして、海外の空気を肌を感じられない環境に置かれているのでは時とともに虚しさが募るといえるものだ。暇を見つけての独習それ自体は悪くない趣味なんだけれど、こんな独り相撲じゃあね。

それならば、あるがままの現実を直視し、趣味なら趣味らしく気ままな学習の一人旅を楽しむようにする方が賢明なのでは。下手な専門家意識にとらわれず、興味を覚えた領域にためらいなく分け入り、いくらかでも見識を広められるならば上出来だ、と心得るべきだろう。ちょうど5年前、目前に迫った70歳代の生き方を展望するにあたって、是非ともそうしようと心中深く思い定めた。

ごく自然ななりゆきとして、長年にわたり自らの研究における空白部と感じてきたものが、そのまま老学生を気取るにいたった私の学習ターゲットになった。後回しになってしまったが、ほかならぬ日本の税制とくに消費税問題こそがそれだった。

ちなみに私はもともと財政学専攻で研究者の道に入った身だし、国際財政、公共経済学、軍事経済、日米経済摩擦、知的財産権紛争、国際政治経済学、アメリカ経済等の理論的・実証的考察に次々携わった道程にあっても、常に財政（学）との関連を問い続けてきたつもりである。ただ、直接的に財政学のテリトリーをくまなく探査しようとしたわけではないので、通り一遍の知識しか持ち合わせない分野も多々ある。30年以上も前に、たまたま代講を頼まれて京大で財政学総論の通年講義を担当したさい、なかんずく税制に関する不勉強を痛感した。そうした財政学者としての自分に対する不満が尾を引いて、次第に慚愧に堪えなくなったのかもしれない。

<「ちりも積もれば」の成果>

まさしく「70の手習い」だった「趣味としての独習」は、税制という身近で、それも高齢者たる私の皮膚感覚にピンピンと伝わるもののあるテーマを選んだこともあって、結構楽しさを味わえた。京大附属図書館や書斎での細切れな読書と資料調べであっても、「ちりも積もれば」で期間が長くなれば意外に知識が堆積し、あれこれの所感も発酵するということを、嬉しく実感した。

2年半の独習の成果（と過去の蓄積の融合）と手前味噌な位置づけをして、2015年春に大阪の某大学院のワークショップで「日本の税制改革の現況と国際比較」と題した講演をおこなった。参加者の多くがアジアからの留学生だった関係で、国際的に見た日本税制の

特質を概括し、日本で進められつつある税制改革の方向性に説き進み、わけても時代の焦点になっている消費増税の特徴と問題点を明らかにすることに努めた。2017年春にも同じ壇上に登った。演題は「消費税をめぐる問題状況―国際比較を踏まえて―」。2年分だけ私自身の消費税に関する知見が豊富になったのを反映して、ほとんど消費税問題に絞り込んだ形の話になった。

2回の講演後の質疑応答を通じて、参加者の大半にとって消費税が重大な関心事になっていることを確認できた。と同時に、留学生の中に母国に消費税が存在する事実さえ知らない人がいたり、日本人の社会人院生であっても同税の仕組みや軽減税率とは何なのかを理解していなかったりと、意表を突かれた点もあった。何はともあれ、誰もが消費税率引き上げの可否を主体的に判断できるようにするために、必要な知識や種々の論議のありかを社会にもっともっと広く厚く伝えなければならないし、私もそれに少しでも役立てればと襟を正す気分になった。

社会貢献につながるかどうかはいざ知らず、その後もヘルパー業務の手が空いた隙に興味的な消費税の独習にいそしむというスタイルを崩さずに、本年に乗り入れた。だが、それなりに安定した局面は、ほどなく急転回。

<局面の変転と「小人閑居して不善をなす」>

今年の早春に妻の骨折事故が起き、突然、わが家には2人の被介護者がいる非常事態になった。イクジーの任務もあって、それまで「ほぼヘルパー」だった私は「ヘルパー専業」に昇格。睡眠4～5時間で家事、介護、孫の面倒見などに明け暮れる日が続き、独習の趣味に向けるゆとり時間など根こそぎ吹っ飛んでしまった。いや、たとえ睡眠を削って机に向かおうとしても、右目視力の急低下という別問題も起きたために、とても勉強に身が入りそうにないのが実情だった。

季節が1つ回って、今度は初夏に、またもや局面が大きく変わった。妻の怪我からの回復と、孫たちの成長に伴うイクジー係の出番激減。そのおかげで、私は少なくとも過去何年も手に入らなかったような自由時間に恵まれることになった。もっとも、介護や家事分担などの都合から長時間にわたって家を空けるわけにはいかないという事情はそのままだから、自由時間とはいっても移動の自由が大幅に制限されたそれではない。しかも、目の調子が悪いときている。となると、書斎に閉じこもって、さあ何をしたものかと迷う羽目に陥るのも致し方なし。

暇をもてあますなんて、一体いつ以来だろう。ふと頭に浮かんだのが、「小人閑居して不善をなす」の警句だった。中国古典「大学」の冒頭に記されたこの言葉に、君子とはほど遠い「小人」寄りの身と自覚しつつも「大学」人として生きた私は、以前から引っかかるものを感じていたが、それが脳裏をかすめたのも何かの因縁かもしれない。

知る人ぞ知るとおり、当の警句には2種類の解釈が存在する。違いの原因になっている

のが閑居の「閑」であって、閑を「暇」と解するなら、「小人物が暇だと良からぬ事をする（だからせっせと働け）」の意となる。ただし、これは誤った俗説であり、正しくは閑は「閑散」から来ていて、「人目がないこと」を指す。よって、「小人物は他人の目がないと良からぬ事をする（だから独りにしておくな）」が正解。私の場合は、他人の目はまったくないし、暇の方なら結構ある。正解側に従えば、独りの状況を変える術のない私は、おのずと悪事に走りがちなのか。「趣味としての独習」が悪事などであるはずはないと前提した上で、ここは俗説側に加担して、目の不具合をだまされししながら、できるだけ独習に励まなければ、と改めて自分に言い聞かせた。

<消費税に関する知見発信の予告>

今年の夏は、全国的に想定外の出来事が続いた「異例の夏」だった。京都市左京区の住民である私も、6月18日の大阪北部地震で震度4の揺れに見舞われたのを皮切りに、西日本豪雨での「避難指示」、最高気温39.8度を記録した「災害級の猛暑」、逆走台風(21号)の最大瞬間風速25.4メートル、と立て続けに有り難くない希有の体験をさせられた。

しかし、人並みに異例の夏の苛烈さを味わいながらも、私個人としては消費税の独習が予想を超えてはかどったと感じている。「閑居」にもそれなりの効能があったということか。そして、秋風の吹く候になって、そろそろ私が抱く所見なり疑念を何らかの形で発信できそうな地点に近づきつつあるのではと思うようになった。奇しくもその矢先に発せられたのが、冒頭の安倍首相の消費税率10%実施宣言だった。それを契機に消費増税がホット 이슈になり出した状況をもって私が好機到来ととらえたのは、以上の文脈においてのことだ、と御理解たまわりたい。

さしあたり、まだ体系だっていない諸々の関心点を順不同で小出しに記す形にしかならないだろうし、拙稿を目にしてもらえる範囲もごく少数の方に限られるものと承知してはいる。ただ、今は便宜的にこのサイトを使っても、折を見てブログに発表の場を移し、意見交流に努力するなら、ある程度は状況の改善につながる可能性だってなしとしない(ブログの開設と運用の仕方さえ知らないくせに厚かましいこと!)。先行き多少とも学術的に有意な著作に昇華できるかもしれないし、ひょっとしたら生煮えの示唆を汲み取って深い考察につなげていただける専門家に出会うという幸運に恵まれるかもしれない。けれども、そんな皮算用は棚上げして、まずは小さな一歩を踏み出したい。「物言わぬは腹ふくるるわざなり」が目下の私の正直な気分です。

蛇足ながら、これはほんの数日前、後期高齢者になったその日からしたため始めた一種の予告文です。でも、本音は自分を激励するための決意の表明という点にあります。予告が空念仏になってしまった時の言い訳は「もう後期高齢者なんだから」だと、これも謹んで予告いたします。どうかお手柔らかに。